

田中千禾夫戲曲全集

第一卷

田中千禾夫戯曲全集 第一卷

定價 四〇〇円

著者略歴

一九〇五年生
一九三〇年慶大仏文科卒

劇作・演出専攻

昭和二九年度読売文学賞受賞
昭和三四年度岸田演劇賞受賞

昭和三四年度週刊読売戯曲賞受賞
昭和三四年度文部省芸術選奨受賞

主要著書

「物言う術」

著者 © 田中千禾夫

発行者 草野貞之

印刷者 山田博

発行所 株式会社白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四

電話東京 〇七八一—五

振替東京 三三二二八

三陽社印刷・加瀬製本



初 演 (昭和8年)

おふくろ

再 演 (昭和26年)





俳優座

おふくろ

東洋高等女学校





第一幕

マリアの首

第四幕





第一幕第四場の忍

マリアの首

雲の涯

同人会



お
ふ
く
ろ

一
幕

登場人物

坂（小倉氏）

母

英一郎

その息子

峰子

その娘

貞子

隣家の娘

宗像夫人

良

その子供

男

右手、六畳の居間と、左手、四畳半の茶の間。六畳の奥の中央、低い障子窓。その右側に卓子、その左側には机。机の側の壁には、丘上に冥想するキリストの絵と、女優のブロマイドがはつてある。卓子のほうには特に電気スタンドが点り、今、英一郎が後向きに勉強中。このほうの壁にはラゲビーの試合のびら。

部屋の中にとたつ。校服の上着のかわりに、ジャケットをわざと後ろ前に着ている峰子が、開いたままのリーダーと手帖とを鼻の下において、半分埋れて正体なき態。坂が縫い物に余念のない茶の間と、この居間との間の襖は半分あいているが、両方の視線は十分にさえぎられている。居間の右手、玄関に通ず。茶の間の奥、台所に通ず。冬の夜。遠くに、夜番の拍子木の音が聞こえている。

貞子の声

(外で) 峰ちゃん!

男の声

(外で) もしもし……。

貞子の声

は?

男の声

この道は抜けられますか?

貞子の声

いいえ。

男の声

そうですか。(遠ざかる)

貞子の声

峰ちゃん!

英一郎

(見おろして) おい。貞子さん呼んでる。(返事なし。立ち上がり正面の障子をあける。する

と、狭い庭の向こうは小さな社で、その社殿の屋根の黒いシルエットの上に月がかかっている。境内とこの庭とのあいだの路地に、貞子が立っているわけであるが、その姿は見えない) 寝てるんです、ぐ

うぐう。(峰子は、ぼんやり目をあけるが、また寝込む)

貞子の声 あら、お兄様なの。

英一郎 何か用？

貞子の声 あのう、わからないとがありますの。(はにかんでいるらしい)

英一郎 何？ 英語？

坂 お前、教えておあぐつといい。

英一郎 (隣室に向かつて) 僕、今、忙しいんだ。

坂 嘘ばかり。

貞子の声 じゃ、明日の朝早くまいりますわ。

英一郎 そう。

坂 明日の朝だって寝とりますわ、貞子さん。(と言ったが、先方まで聞こえたかどうか？)

貞子の声 あのう、お兄様の試験も明日でしょう？

英一郎 落っこちます。

貞子の声 そんなことはありませんわ。きっとパスなすってよ。そしたら、いよいよ、ジャーナ

リストね。素敵だわ。

英一郎 寒いでしょう。おばさんによろしく。じゃ、また……。

障子をしめて元の座に戻る。

貞子の声 おやすみなさい。(遠ざかる)

坂 そんなんぶつきら棒な物の言い方ってあるとですか、英一郎。

間。

坂 峰ちゃん……（返事なし）峰ちゃん。

峰子 う？

坂 寝とるんでしょ、また。

峰子 （意外にはっきり）嘘よ、勉強してんのよ。

間。

英一郎 （疲れた、といった態度で、ぐたりと背中をもたせかける）

坂 峰ちゃん……（相変わらず返事なし）峰ちゃん。

峰子 う。

坂 寝とるんでしょ、また。

峰子 勉強してらったら、うるさいのね。（ふとんを胸の上まで引つ張る）

やや長い間。

坂 み、ね、ちゃん。……み、ね、こ、を。……起こしてくれよ、英一郎……ねえ。

英一郎 起きますよ、放つといったら。

坂 十二時になったらだろう。

英一郎 ああ。

坂 そのうちにゃこ、つ、ちが眠ってしまいそうだ。妙な子だね。ご飯食べてこたつにもぐり込む

とうつつらうつらやりだして、起きるのが夜中。それからまた本ば読みだす。

英一郎 眠くてしょうがないんでしょ、昼間さんざんっばら遊んでるんだから。

坂 試験だっていうとに困ったもん。よく寝てるのば見っと起こすのが可哀そうになるし……

お前、何しとるの？

英一郎 煙草ぐらいすってもいいだろう、おっ母さん。僕は寝てなんかいませんよ。

坂 それならよかけど。

間。

坂 ねえ、英一郎。お前から、少しきびしく言ってもらわんと困るわ。

英一郎 ……………

坂 このまま打っちゃらかしといたら、この子、この先どんげんなるか知れやしない。

英一郎 ……………

坂 お前も、少し兄貴らしく妹のことぐらい……。

英一郎 (気のなさそうなま返事をする)

坂 今朝もお前、八時半まで、三十五分まで寝とるのよ。そして寝坊したって、おっ母さんのせいにしてぶんぶん怒っとるの。お茶碗も箸も出し放しで泡くってかけだしたと。いくらスポーツが早かったって、くたびれるにきまっとるわよ、本当に。晩は晩でまたこのとおり。茶碗一つ自分で洗おうとせん、何から何までおっ母さんにやらする。学校のお裁縫まで押つつくつとだからね。その癖、自分っていえば……。

英一郎 そう気をもまなくってもいいでしょう。

坂 さっきなんか、余り腹が立ったから、よっ程となりつけてみてやりたかったんだけど（急に声をひそめて）この前、怒ったときね、お前、お隣のおばさん、まるで鬼婆だって笑うのよ……私、そんなに大きな声出すのかしらん。

英一郎 すげえからな、おっ母さん、怒ると。桑原桑原。

坂 お前に怒れたら、どんなによかかしらんと思うことがある。

英一郎 ……………

坂 どんなにさ、ぱりするかと思うと、どんなに……。

英一郎 やったかどうかです。じゃ。ええ、やったら？

坂 （笑いながら）ああら……ただ、怒れたらって言うただけじゃなかか。

英一郎 おっ母さん、僕を怒りたくて怒りたくてしかたがないんでしょ。むずむずしてるんでしょ。知ってますよ。

坂 いい子だね、お前は。

沈黙。

坂 この頃おかしな帽子がはやっとなるのね。峰子がまたねえ……ねえ。

英一郎 少し黙って下さい。

坂 峰子ねえ、その帽子、買ってくれ、買ってくれて言うたい。

英一郎 このあいだ買ったばかりじゃないか、フェルトの。

坂　また欲しかったさ。何とか言ったよ、あのほら、てっぺんに紐みたいなものが……。

英一郎　ベレエだろう。

坂　そうそう。それも安いんじゃないかと。

英一郎　あんな帽子大嫌いだよ、僕。西洋の獵人^{カウボーイ}のかぶるものなんだ、もともとありや。買つてやんなさんな。

坂　だからねえ、四月まで待てて言ったのよ。そしたら兄さんが新聞社に入れて、月給取るようになるけん……。

英一郎　冗談言っちゃいけませんよ、おっ母さん。そううまくは行かないんですからね。しょうがない奴だな、峰子。

坂　よかよか、おっ母さんが買うてやる、明日にでも。

英一郎　じゃ兄貴も一つ買っていたきましようかな、オーバー。

坂　厭ですよ。自分で買え、買え。

英一郎　またこいつ、帽子、どうかしたんじゃない？

坂　そうたい、型を変えらんだって言うて、帽子、じょきじょき切っちゃったの、買ったばかりのを。

英一郎　従妹ベットの血を引いてるね、こいつ。なるほどベレエなら細工のしようがないだろう。

坂　お友だちがかぶってらっしゃると直ぐ自分もかぶりたくなるもんだい。きっと関さんの妹